

鵝湖の会再考

—陸九齡、陸九淵の思想詩二首を中心に—

中嶋 諒

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

1. はじめに

淳熙二年（1175）、陸九齡（復齋、1132～1180）、陸九淵（象山、1139～1192）兄弟は、当時頭角を現しつつあった朱熹（朱子、1130～1200）と、江西鉛山の鵝湖寺において対面し、論争を繰り広げた。これが中国思想史上名高い鵝湖の会である¹。

筆者はこれまで一貫して陸九淵（およびその門弟たち）にかんする研究を進めており²、すでにこの鵝湖の会についても考察したことがある³。けれどもそこで詠まれた陸兄弟の詩二首については、いまだ論及していない。中国ではとりわけ宋代以降、詩によって自らの哲学を開陳しようとするものが現れた⁴。また朱熹も生涯多くの詩を詠じたが、そのことに着目し、朱熹の「詩人」としての側面を掘り起こそうとする研究もある⁵。したがって、鵝湖の会にあたって詠まれた陸兄弟の詩もまた、彼らの思想、あるいは人物像を分析するうえで、看過しえないものであろう。

本稿は、いささか小論ではあるが、鵝湖の会に際して詠まれた陸兄弟の詩二首を取り上げ、先の拙論の欠を補うとともに、従来の研究とは異なる、これらの詩に対する独自の解釈を提示してみたい。

2. 陸九齡と陸九淵の思想詩二首：およびこれらに対する先行研究の立場

まずは議論の中心となる陸兄弟の詩二首の原文と平仄、訓読を挙げておこう。以下は陸九齡の詠じた七言律詩である。

孩提知愛長知欽	○○○●●○○○	孩提 愛を知り 長じて 欽しみを 知る
古聖相伝只此心	●●○○○●●○	古聖 相伝ふるは 只だ此の心のみ
大抵有基方築室	●●●○○●●●	大抵 基有りて 方めて室を 築く
未聞無址忽成岑	●○○●●○○○	未だ聞かず 址無くして 忽ち岑を 成すを
留情伝註翻藜塞	○○○●○○○●	情を伝註に 留むれば 翻つて藜塞し
着意精微転陸沈	●●○○●●○○	意を精微に 着けば 転た陸沈す
珍重友朋相切琢	○●●○○●●●	珍重す 友朋 相切琢するを

須知至楽在于今 ○○●●●○○○ 須らく知るべし 至楽 今に在るを

『陸九淵集』巻34、「語録」上・203条、巖松録／427頁⁶

続いて、陸九淵の詠じた詩である。これは上掲の陸九淵詩の韻字「欽」「心」「岑」「沈」「今」（いずれも下平声・侵韻）を、順序通りにそのまま用いた次韻詩となっている。

墟墓興哀宗廟欽	○●○○○●○	墟墓に哀を興こし 宗廟に欽しむ
斯人千古不磨心	○○○●●○○○	斯の人 千古 不磨の心
涓流滴到滄溟水	○○●●○○●	涓流 滴りて 滄溟の水に到り
拳石崇成泰華岑	○●○○○●●○	拳石 崇くして 泰華の岑を成す
易簡工夫終久大	●●○○○●●	易簡の工夫は 終に久大
支離事業竟浮沈	○○●●●○○○	支離の事業は 竟に浮沈
欲知自下升高処	●○●●○○●	下き自り 高きに升る処を 知らんと欲せば
真偽先須辨只今	○●○○○●●○	真偽 先づ須らく 只今に弁ずべし

同上（また『陸九淵集』巻25、「鵝湖和教授兄韻」）／427頁

なお陸九淵は、陸九淵詩に対して「甚だ佳なり」との評価を下したが、第二句のみ「微かに未だ安からざる」ところがあるとして、自身の詩を詠じたのだという（『陸九淵集』巻34、「語録」上・203条）。双方の詩の第二句を比較すると、陸九淵が「古聖相伝ふるは」云々と、「心」を古代の聖賢が相伝したものと見るのに対して、陸九淵は「斯の人千古不磨の心」と、「心」を（古聖の相伝を俟つまでもなく）古今を問わず誰しもが有するもの（数千年を経ても磨滅しないもの）だと解している。すなわち陸九淵は、陸九淵詩の中に、古代の聖賢のみに「心」を限定させる意向を読み取って、「心」をより開かれたものとすべく自身の詩を詠じたのであろう⁷。

さてこれらの詩は、現在日本で刊行されている『陸九淵集』の抄訳（訓読とそれに対する簡解を附したもの）二種いずれにも掲載されている。まずはその陸九淵詩に対する解説を見ていこう。

(1) 『陸象山』（陽明学体系第4巻、明德出版社、1973年10月）

象山の心学の要領を最もよく示している。(136頁・頭注)

(2) 福田殖氏『陸象山文集』（中国古典新書、明德出版社、1972年10月）

象山にとって哀欽する心は、人間なら誰にでもある不滅のものであり、本心であった。……この本心を立てるところに象山の心の思想の中心はあるのである。(186頁)

これら二つの訳注の立場は同一であろう。すなわち陸九淵詩の首聯（第一、二句）、とりわけ「斯の人千古不磨の心」（人間なら誰にでもある不滅のもの）という語に着目し、これこそが陸九淵の学、すなわち陸九淵心学の要領であるというのである。

また朱熹や陸九淵にかんする専著専論においても、上掲の詩は引用されることが多い。ここでは両詩に対して、比較的詳細にわたって論及している友枝龍太郎氏、三浦國雄氏、石田和夫氏の著述を取り上げておきたい。

(3) 友枝龍太郎氏『朱子の思想形成』（春秋社、1969年3月）

（陸九淵詩で）「支離の事業は竟に浮沈」と言い、（陸九淵詩で）「情を伝註に留めて翻って藁塞、意を精微に着けて転た陸沈」と言うのは、いずれも朱子の解釈学と哲学的思索が、生ける愛哀

敬欽の心情を窒息昏沈せしめることを指摘したものである。(22頁)

(4) 三浦國雄氏『朱子』(人類の知的遺産 19、講談社、1979年8月／のち『朱子伝』、平凡社ライブラリー、平凡社、2010年8月)

(陸九齡詩の) 第五句・六句は、朱子の誇る精密な經典解釈と哲学的思索とは心を窒素させるだけだという批判である。(154頁)

(陸九淵の) 詩の意味をほぐしておけば、第一句は、墳墓と宗廟に向かうとき、人の心に自然に悲哀と敬虔の情が湧き起ることをいう。そしてこの心こそ、千年たっても磨滅しない人間の本心であると第二句へ続く。三・四句は、ちよろちよとした流れがやがて大海に至り、こぶしほどの小さな石も、積み重なれば泰山や華山のようになるというのが表面上の意味で、すべての出発点であるこの本心に立脚して、それを拡充(おしひろげる)してゆくことをいう。第五句の自己の思想の宣揚、第六句の朱子の批判は、この詩の中心である。……「易簡」はもと『易経』に由来し、これも文字通り平易にして簡直なることをいうが、近世でこれを拈出したのは象山である。象山においては「心即理」——心がそのまま理として高々と掲げられるから、この心を存養拡充すればそれでよく、心の分析や窮理といった煩瑣な手続きを必要としない。(156頁)

友枝氏は陸九齡、陸九淵の両詩の頸聯(第五、六句)に着目している。具体的には陸九淵詩の「支離の事業」、陸九齡詩の「情を伝註に留む」、「意を精微に着く」といった文言が、解釈学(伝註)や哲学的思索(精微)などにかかずらう朱熹への弁難であると指摘する。また三浦氏も、陸九淵詩の頸聯をもって、「この詩の中心である」と明言していることには注目されたい。

(5) 石田和夫氏「陸象山とその後継 陸象山から王陽明まで」(岡田武彦氏編『陽明学の世界』、明德出版社、1986年11月、所収)

(陸九淵の) 詩中「易簡の工夫」が人間固有の心の確立を工夫のすべてとする象山の心の立場であり、「支離の事業」が格物窮理を工夫の第一義とする朱子の理の立場であることは、改めて説明するまでもあるまい。人間の偽らざる心を根本とした自己の学問に対する揺ぎない自信と、本末を転倒した朱子の学問に対する激しい疑惑とを、この詩によって象山は、朱子の眼前に突きつけたのである。(12頁)

石田氏は、陸九淵詩の頸聯に見える「易簡の工夫」、「支離の事業」の両語について、前者を陸九淵の心の立場、後者を朱熹の理の立場であると見なす。すなわちこの詩で陸九淵は、自らの学を、自身の心の確立を目指せばよいという極めて簡便(易簡)なものであるとする一方で、朱熹の学を、その心(内面)を確立することなく、ひたすら外界の事物の理を追求するもの(格物窮理)だとして、それが本末転倒であるとの舌鋒を突きつけているというわけである⁸。ともあれ友枝氏、三浦氏、石田氏ともに、陸九淵詩の頸聯に着目して、それが陸九淵自身の思想の宣揚と、朱熹に対する激しい批判の現れであるとするところは同一であろう。

以上のことをまとめると、従来の二陸の詩に対する解釈には、とりわけ陸九淵詩の首聯に着目し、それが陸学(心学)の要領であると解するか、あるいは両詩の頸聯に着目し、それが朱陸の対抗関係、および思想的差異を表現したものであると解するか、という二つの立場があったということが

できるであろう。

3. 陸九淵思想の再確認：筆者のこれまでの研究成果を踏まえて

さて以上で、二陸の詩に対する先行研究の解釈を概観してきたが、ここで留意しておきたいのは、これらに「象山（＝陸九淵）の心学」、「象山の心の思想」、「象山の心の立場」といった記載が見えることである。一般的に陸九淵の学は、誰しもの心が本来善であることを強調し、それに多大なる信頼を置く「心」の学、すなわち「心学」であると称される。その根拠とされるのは、例えば以下のような陸九淵のことばである。

人の心はこの上なく靈妙で、この理はこの上なく精明である。人は皆この心を持ち、この心は皆この理を備えている。〔人心至靈、此理至明。人皆有是心、心皆具是理。〕『陸九淵集』卷22、「雜説」13／273頁

天が我々に賦与したものとこそ、この心である。人は皆この心を持ち、この心は皆この理を備えている。心は取りも直さず理なのである。〔天之所以与我者、即此心也。人皆有是心、心皆具是理。

心即理也。〕『陸九淵集』卷11、「与李宰」2／149頁

陸九淵にとって「心」とは、天から賦与されたものであり、この上なく靈妙なるものである。そしてこの「心」は、この上なく清明なるものである「理」と即応せられ、「心即理」（心＝理）という命題が掲げられる。すなわちこれらの資料を見るかぎり、陸九淵は我々の「心」を「理」として正しい、完全無欠なるものととらえているかのようである。

また陸九淵にとって、この誰しもが有する完全無欠なる「心」は、数千万世の時を隔てた、あるいは東西南北に距離を隔てたところにある聖人の「心」とも違うことはないのだという。陸九淵はさらに別の箇所でも、以下のように述べている。

千万世の前に聖人が現れるも、この心、この理は同じである。千万世の後に聖人が現れるも、この心、この理は同じである。東西南北の世界に聖人が現れるも、この心、この理は同じである。

〔千万世之前、有聖人出焉、同此心同此理也。千万世之後、有聖人出焉、同此心同此理也。東西南北海有聖人出焉、同此心同此理也。〕『陸九淵集』卷22、「雜説」11／273頁

陸九淵詩の第二句には、「斯の人千古不磨の心」とあった。これをこの「雜説」の記載と併せて考えるならば、数千万世の時を隔てた聖人たちの心や理は、歳月を経ても磨滅することなく、我々の心にそのまま備わっているということになるだろう。

けれどもその一方で、陸九淵は、いくら我々が聖人と同一の心や理を備えているからといって、いついかなる時にも聖人のごとき行為行動が取れるわけではないという。

聖人の為すところについて、そもそも常人はことごとく為すことはできないが、また為すところもある。聖人の為さないところについて、そもそも常人は皆まで為さないことはできないが、また為さないところもある。聖人の為すところを為し、聖人の為さないところを為さないということにおいては、我々は皆天地の中を受け、一心の靈に根ざして、磨滅しえないものである。〔聖人之所為、常人固不能尽為、然亦有為之者。聖人之所不為、常人固不能皆不為、然亦有不為者。

於其為聖人之所為、与不為聖人之所不為者觀之、則皆受天地之中、根一心之靈、而不能泯滅者也。』『陸九淵集』卷21、「論語說」／264頁

たしかに我々は、ときに聖人のごとき行為行動を取ることがある。陸九淵詩の第一句「孩提愛を知り長じて欽しを知る」、陸九淵詩の第一句「墟墓に哀を興こし宗廟に欽しむ」は、それぞれ『孟子』尽心上「孩提の童、其の親を愛するを知らざる無きなり。其の長ずるに及ぶや、其の兄を敬ふを知らざるなきなり」、『礼記』檀弓下「墟墓の間、未だ哀を民に施さざるも民哀しむ。社稷宗廟の間、未だ敬を民に施さざるも民敬ふ」を典拠とするが、このように父兄に敬愛の念をもって接すること、墟墓（荒れ果てた墳墓）を哀しみ、宗廟（祖先のみたまや）を敬うことなどは、聖人でなくとも、人間誰しものが取りうる正しい行動なのであろう。けれども、陸九淵自身が「聖人の為す所、常人固より尽くは為す能はず」というように、ときに我々が、聖人のごとく振舞えない状況などいくらでも想定できるはずである。

なおここで陸九淵は、「聖人の為す所を為すと、聖人の為さざる所を為さざる者とに於いて之を觀れば、則ち皆な天地の中を受け、一心の靈に根ざして、泯滅する能はざる者なり」という。すなわち我々の心の靈妙さは、聖人と同様の行為行動をなしえたときのみ発揮されるというのである。例えば父兄に敬愛の念をもって接しているときの「心」は靈妙であり、それは聖人の「心」とも一致しており、また「理」が備わっている。そしてそれは数千万世の時を経ても磨滅しえないものであるといえようが、これをもって我々の「心」は、いついかなる時にも聖人と一致しており、いついかなる時にも「理」を備えているとは到底いえるはずがない。人々は日々、数限りない行為行動を取りながら生きているわけであるが、そのすべてが聖人と一致するはずはなく、それが聖人と一致したときのみ、「心即理」（心＝理）という命題は成立しうるのである。

ところで陸九淵は、一般的に、先人の書を読むこと（読書）や自ら書を著すこと（著作）にあまり関心がなかったといわれてきた。例えば前掲の陸九淵詩に見える「情を伝註に留むれば翻つて藁塞す」などは、多くの経書の注釈書（伝註）を撰述した朱熹に対する非難の言辞といえようが、陸九淵詩の「支離の事業は竟に浮沈」もまた、朱熹に対する同様の批判であると考えられよう。たしかに陸九淵は、

例えば「弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟」などは、家にあつては孝を尽くし、外に出ては悌を尽くせと明言しているまでのこと。どうして伝や注釈などを用いようか。〔且如弟子入則孝、出則弟、是分明説与你入便孝、出便弟、何須得伝註〕『陸九淵集』卷35、「語録」下・74条、李伯敏録／441頁

と、経書解釈（伝註）の不要を訴えている。けれどもこれは『論語』学而「弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟」についていわれているのみであり、このような箇所においては伝註が不要であるとの主張であらう。父兄への孝弟（悌）といったことは、墟墓（荒れ果てた墳墓）を哀しみ、宗廟（祖先のみたまや）を敬うことなどと同様に、聖人でなくとも、誰もが当然取りうる行動なのであるから、ことさらに伝註によって、その必要性を説明されるまでもない。

しかしだからといって、陸九淵は経書にまったく伝註が必要ないとは考えていなかった。例えば陸九淵は、

ある人の質問「六経を読むにあたって、まず誰の注解を読むべきでしょうか」。先生（＝陸九淵）「まずは古注を精読することだ。『春秋左氏伝』を読むならば、杜預の注は精読しないわけにはいかない。〔或問、読六経当先看何人解註。先生云、須先精看古註。如說左伝、則杜預註不可不精看。〕『陸九淵集』卷34「語録」上・105条、傅子雲録／408頁

と、漢唐の古注、具体的には杜預『春秋経伝集解』などを精読することを求めていたし、さらには、孝宗皇帝（寿皇）が帝位を譲り、光宗皇帝が即位されると、先生は荆門軍の知事となるよう詔を受けた。先生ははじめ著作をしたいと思い、かつて「諸儒らが『春秋』を誤って説いていることは、他の経書よりもとりわけひどいものである」と言っていた。まずは『春秋』の伝を著そうとしていたのだが、荆門軍知事の命を受けてしまったので、果たせなかった。〔寿皇内禪、光宗皇帝即位、詔先生知荆門軍。先生始欲著書、嘗言諸儒説春秋之謬、尤甚於諸経。将先作伝、值得守荆之命而不果。〕『陸九淵集』卷36、「年譜」、淳熙16年／506頁

と、（それは叶わなかったものの）自ら『春秋』の伝を著すことも企図していた。要するに陸九淵は、経書には難解な箇所があり、そのような箇所については積極的に漢唐の古注を参照することを求め、さらには自ら注釈書を執筆することにも吝かではなかった。けれども注釈に頼るまでもなく、容易に理解できる箇所、例えば父兄には敬愛の念をもって接するなど説かれた箇所については、わざわざ伝註を持ち出す必要はない。「情を伝註に留むれば翻つて藜塞す」は、朱熹が經典に注釈（伝註）を附すこと自体に対する批判であるというよりも、経書のすべての記事に、一様に注釈を施していることとする態度への批判であったといえよう。

4. むすび：陸九齡と陸九淵の思想詩二首の再解釈

本稿では、陸兄弟の詩二首を軸に議論を進めてきたが、『陸九淵集』所載の鵝湖の会にかんする記録はこれのみではない（なお朱熹側の資料には鵝湖の会にかんする記録はない）。陸九淵の死後まとめられた「年譜」には、鵝湖の会に列席した二陸の門弟、朱泰卿（亨道）の書簡の一部が引かれている。

鵝湖の会では、話題が門人教育にまで及んだ。朱熹（元晦）の考えは、まずは博覧にさせ、それから簡約に戻らせるというものであった。二陸の考えは、まずは本心を明らかにさせ、それから博覧にさせるというものであった。朱熹は二陸の教法を簡便に過ぎるとし、二陸は朱熹の教法を支離として、ほとんど合意しなかった。〔鵝湖之会、論及教人。元晦之意、欲令人泛觀博覧、而後歸之約。二陸之意、欲先發明人之本心、而後使之博覧。朱以陸之教人為太簡、陸以朱之教人為支離、此頗不合。〕『陸九淵集』卷36、「年譜」、淳熙2年／491頁

ここで着目したいのは、陸九淵がその門人教育にかんして、まずは本心を明らかにさせつつも、それに終始したわけではなく、その後に博覧に至らしめるよう求めていたことである。「本心」とは、周知のごとく、もと『孟子』告子上に見える語であり、人間誰しもが生まれながらに持つ正しい心といった意であろうが、これは陸九淵自身のいう「人心は至靈」（人の心はこの上なく靈妙である）や「心は皆な是の理を具ふ」（心は皆この理を備えている）の「心」、あるいは前掲の陸九淵詩に見

える「千古不磨の心」（数千年を経ても磨滅することのない心）などと言い換えられよう。このような心があるからこそ、人は教えられるまでもなく、父兄に対して敬愛の念をもって接することができるわけである。

ただし前述のとおり、人はいついかなる時にも聖人のごとき行為行動を取れるわけではないし、また経書のすべての箇所を容易に理解できるわけでもない。それゆえ陸九淵は、経書解釈（伝註）自体を不要とはせず、ときに漢唐の諸注釈を参看することを求め、さらには自ら『春秋』の伝を執筆することも企図したのである。すなわち陸九淵は、自らの心の正しさ（本心）を明らかにした上で、例えば経書において、その心を頼りにすれば容易に理解できる箇所を見極める。ただそれだけで経書のすべての箇所を解説できるわけではないので、それ以外の箇所については、先人の様々な注釈を広く参照（博覧）していくのである。これが陸九淵のいう、本心の発明から博覧にいたらしめる門弟教育の具体的な方法であろう。

それに対して朱熹は、まず博覧を求める。例えば経書を読むにあたっては、まずは虚心に、先人の解釈を広く参看しなければならないというのであろう。朱熹に言わせれば、心の正しさなどという極めて主観的な要素をその出発点とする陸九淵の教法は、到底承服しえず、それゆえ簡便に過ぎるとの舌鋒を向けたのである。

さて最後に、ふたたび陸兄弟の詩に立ち返ってみたい。陸九齡詩の頷聯（第三、四句）には「大抵基有りて方めて室を築く／未だ聞かず址無くして忽ち岑を成すを」とあったが、これはすなわち基礎がなければ、家屋や岑楼を建てることはできないということである。また陸九淵詩の頷聯「涓流滴りて滄溟の水に到り／拳石崇くして泰華の岑を成す」も、「涓流」（ちよろちよとした流れ）や「拳石」（こぶしほどの小さな石）から、「滄溟の水」（大海）や「泰華の岑」（泰山や華山）になるという物事の順序を述べたものであろう。さてこれらは、あるいは上述した、本心の発明から博覧に至らしめるという、陸九淵の段階的な門弟教育の方法を指していると考えすることはできないであろうか。陸九淵はまず何よりも、誰しにも備わる心の正しさを出発点とする。このような基礎がなければ、何一つ打ち立てることはできず、結局のところ本末転倒である。けれども基礎を築くことだけで、満足してよいはずはなく、それから博覧に努めて、家屋を完成させることを目標としなければならない。

さらに陸九淵詩の第七句には「下き自り高きに升る処を知らんと欲せば」とあるが、これもまた下きから高きへという陸九淵の段階的な教法を指しているのではなかろうか。もちろん続く第八句に「真偽先づ須らく只今に弁ずべし」とあることから、尾聯（第七、八句）ではまず、いま（聖人のごとく）取りうる行動、いま（伝註を用いるまでもなく）分かる内容を出発点とすべきことが詠じられているといえようが、決していつまでもここに安住していればよいというわけではあるまい。その後は博覧に努め、さらなる高みを目指すことが求められるはずである。

従来、鵝湖の会における陸兄弟の詩の解釈では、取り立てて頷聯や尾聯が注目されることはなかったが、上述の通り、これらは陸九淵が主張する段階的な教法を示唆した箇所であるとも解せよう。それゆえ首聯や頸聯と同様に、あるいはそれ以上に重要視すべきではないであろうか。以上、これを結論として擱筆することとしたい。

注

- ¹ 鵝湖の会については、例えば陳榮捷氏「鵝湖之会」（『朱子新探索』、台湾学生書局、1988年4月、所収／564～567頁）、東景南氏「鵝湖之会」（『朱子大伝』、福建教育出版社、1992年10月、所収／336～347頁）など、多数の研究の蓄積がある。また陳来氏『朱子哲学研究』（華東師範大学出版社、2000年9月）は、従来朱陸の仲介者と見なされてきた呂祖謙（東萊）が、当初より朱熹とともに、二陸批判に努めていたことを指摘する（356～357頁）など、示唆に富む。
 - ² 筆者の陸九淵研究の成果は、拙著『陸九淵と陳亮 朱熹論敵の思想研究』（早稲田大学出版部、2014年10月）、拙稿「陸九淵哲学新考 陸九淵是否為“心学”思想家？」（『江南大学学报 人文社会科学版』14-3、2015年5月）などを参照。また陸九淵の門弟にかんするものとして、拙稿「陸九淵とその初伝の門弟 傅夢泉と楊簡を中心に」（『実践女子大学 CLEIP ジャーナル』1、2015年3月）、拙稿「陸学の「人心」「道心」論 いわゆる「朱陸折衷」の淵源を辿る」（『言語 文化 社会』15、2017年3月）などがある。本稿は、これらの成果を踏まえたうえで、鵝湖の会における二陸の詩二首を再読することを目的とする。
 - ³ 拙稿「陸九淵の思想における他者の役割」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』53-1、2008年2月／のち注2所引の拙著に再録）で触れた。
 - ⁴ 松川健二氏「宋明の思想詩」（北海道大学図書刊行会、1982年6月）の「はしがき」には「詩という形式が、自己の思想の表出のためにふさわしいものか否か、個々人がそれを如何に認識するか、多様な判断が存在しようが、少なくとも中国の宋代・明代に、思想詩と称すべき作品が数多く作られたのは事実である」（ii頁）という。
 - ⁵ 宋元文学研究会、のち日本漢詩文学会編『朱子絶句全訳注』（既刊5冊）。その第5冊（汲古書院、2015年8月）の「はしがき」にて、宇野直人氏は、「彼（朱子）は生涯に一二三首もの詩を残し、また自作の詩や文章の中でしばしば先人の文学作品を批評し、さらに作詩・作文の要諦について語っている。彼は文学の方面にも並々ならぬ関心を持ち続けていたのだった。したがって朱子の詩を読むことは、彼の感性や価値観を知り、その全体像に近づくための必須の作業であると言える」（1～2頁）という。
 - ⁶ 『陸九淵集』の引用は、いずれも鍾哲氏による評点本（中華書局、1980年1月）を使用した。なお引用に際しては、適宜句読点等の符号を改め、また基本的に新字で統一し、「余」と「餘」、「芸」と「藝」等、新字に改めれば判別が不能な文字のみ本字のままとした。
 - ⁷ これについては、東景南氏、注1所引書などに指摘がある。また松川健二氏、注4所引書、Ⅲ「不信人間有古今 朱熹と二陸」は、朱熹が鵝湖の会の三年後、陸九淵詩に次韻して詠じた「鵝湖寺和陸子寿」（『朱文公文集』巻4、所収）と題する七言律詩（とりわけその尾聯）を主題とするものであるが、二陸詩それぞれの首聯を端緒として、陸兄弟の異同にも言及している。
 - ⁸ 陸九淵は、例えば以下に挙げた曾祖道（宅之）宛ての書簡においても、「支離」の語を、内（＝心）と外（＝外説）の反転、すなわち主客転倒を表わすものとして批判的に用いている。「所病於吾友者、正謂此理不明、内無所主、一向縈絆於浮論虚説、終日只依藉外説以為主、天之所与我者反為客、主客転倒、迷而不反、惑而不解。坦然明白之理可使婦人童子聽之而喻、勸学之士反為之迷惑、自為支離之説以自縈絆、窮年卒歳、靡所底麗、豈不重可憐哉。」（『陸九淵集』巻1、「与曾宅之」／4頁）
- * 本稿は、2013年9月7日、日本漢詩文学会・第2回例会（共立女子大学）での口頭発表「陸九淵思想の再検討 いわゆる「六経註脚論」を中心に」の一部を基とし、加筆訂正したものである。
- * 本稿の脱稿後、陸九淵再伝の弟子である包恢（宏斎、1182～1268／陸九淵「語録」記録者の一人、包揚の子）による以下の記事を目にする機会があった。これは陸九淵詩の韻聯に着目したもので、筆者の説を補強するものであると思われるので、ここに挙げておきたい。「況今有近於入門入路一步之初、遽止而不復進歩、豈先生之学哉。抑嘗記先生之詩乎、涓流積至滄溟水、拳石崇成泰華岑。先生、滄溟泰華也。学者或止涓流拳石、而未知有積至崇成之功用。」（『敵帚稿略』巻3、「象山先生年譜序」／四庫全書本、4葉裏）